

論文の内容の要旨

論文題目 初期近代スペインにおけるオスマン帝国の表象
——16世紀半ばから17世紀半ばにかけて——

氏名 三倉 康博

オスマン帝国をスペイン語で記述し、16世紀半ばから17世紀半ばにかけて出版ないし執筆された歴史記述的作品あるいは文学作品のなかから、7編の主要かつ代表的なテキストを取り上げて、歴史背景との関係、同時代の他のヨーロッパ諸国における同種の文献との比較を念頭に置きつつ、それら7編にみられるオスマン帝国の表象を分析することで、初期近代スペインにおけるオスマン帝国の表象の特色を、約1世紀という限定された時間の枠のなかで明らかにするのが、本論文の目的である。

本論文は「序説」「第Ⅰ部」「第Ⅱ部」「第Ⅲ部」「結論」によって構成される。

「序説」においては、初期近代におけるスペインとオスマン帝国の関係に関する文化面からの研究が、スペインとイスラーム世界の関係史を論じるさいも、ヨーロッパにおけるオスマン帝国のイメージを論じるさいも、必ずしも重視されてこなかったこと、その不足を補う必要があることをまず指摘した。そのうえで、本研究にあたっての三つの視点を設定した。第一に、本論文が考察対象とする時間枠である、16世紀半ばから17世紀半ばにかけて、オスマン帝国が内外の各方面で経験した様々な変化が、スペイン作家たちのテキストにどのように反映されているか。第二に、それぞれの書き手とオスマン帝国のあいだの具体的な関係が、彼らの作品にどう反映されているか。第三に、同時代の他のヨーロッパ諸国で著されたオスマン帝国関連文献と比較して、スペイン語文献にどのような独自性がみられるか。

本論文の第Ⅰ部では、7編のスペイン語テキストを歴史的コンテキストのなかで読み解くための前提となる、歴史背景を概述した。第Ⅱ部と第Ⅲ部では、「序説」で提示した三つの視点を意識しつつ、7編のスペイン語テキストを時代別に大きく二つのグループに分けて、それぞれのテキストにおけるオスマン帝国の表象のあり方を分析した。

第Ⅰ部第1章では、オスマン帝国の発展、ヨーロッパ諸国そしてスペインにおけるオスマン帝国への関心の高まり、オスマン帝国を記述する様々な文献の出現という歴史背景について概観した。

第2章では、第Ⅱ部・第Ⅲ部でスペイン語諸テキストを分析するさい重要になる、同時代のヨーロッパ諸国におけるオスマン帝国関連文献の基本的特徴、特にオスマン帝国の表象にみられる、いくつかの定型的パターンを概観した。

第Ⅱ部では、オスマン帝国においてスレイマン1世（大帝）が在位中であった16世紀中葉にスペイン語で書かれた、3編のテキストについて論じた。それぞれの作品に1章ずつをあてて、伝記的・書誌的事実を概述したあと、オスマン帝国の表象を分析した。

第1章では、印刷業者・作家バスコ・ディアス・タンコによるオスマン王朝史『忌まわしく残忍な民トルコ人に関し語られてきたことの集成』（1547年出版）を分析した。

第2章では、バレンシア人ビセンテ・ロカによるオスマン帝国に関する総合的事情報告『トルコ人の起源と数々の戦争の歴史』（1556年出版）を分析した。

第3章では、作者不詳のジャンル混濁的な対話篇『トルコへの旅』（1555-57年頃執筆）を分析した。

いずれの作品も、他言語（イタリア語など）による、先行するオスマン帝国関連文献に大きく依拠しつつ、過去から同時代にかけてのオスマン帝国を描いている。

バスコ・ディアス・タンコがスレイマン1世の治世前半までを描いているのに対し、ビセンテ・ロカおよび『トルコへの旅』の作者は、オスマン宮廷に混乱も生じていた治世後半にかけての時期も描いているが、オスマン帝国の繁栄と強大さを認め、スルタン専制のもとで効率的に統治される軍事国家と帝国を位置づけている点は、これら3作品に共通する。

いずれの作品も、同時代のヨーロッパに流布していた記述のパターンを踏襲しつつ、好意的な見方と否定的な見方をまじえてオスマン帝国を描いているが、それぞれの作品から浮かび上がるオスマン帝国のイメージには差異がある。特に『トルコへの旅』には、ヨーロッパそしてスペインへの強い批判精神の裏返しとして、オスマン帝国に対し好意的な見方を示している箇所が多い。とりわけ帝国の宗教的多元性に対する肯定的な見方は、ビセンテ・ロカと対照的である。

その一方で、スペイン帝国とオスマン帝国を対称的な、しかも宿命的な対立を運命づけられた二つの世界帝国とみなす意識、オスマン帝国と対峙するヨーロッパ・キリスト教世界のなかでスペインに特別な地位を与え、スペイン君主が主導する十字軍によるオスマン

帝国打倒を期待する意識が、この三つの作品には共通してみられる。

第Ⅲ部では、スレイマン1世没後、具体的には16世紀末から17世紀初頭にかけてのオスマン帝国を17世紀の前半に描いた4編のスペイン語テキストを、第Ⅱ部と同様の方針で分析した。

第1章では、虜囚として、そして自由回復後はイスタンブールのフランス大使の保護を受けてオスマン帝国を実見した、シチリア出身の聖職者オタビオ・サピエンシアによるオスマン帝国事情報告『トルコに関する新論述』（1622年出版）を分析した。

第2章では、オスマン帝国中枢部を実見することのなかった二人の文学者による、イスタンブールを舞台としたフィクション文学作品、すなわちミゲル・デ・セルバンテスの戯曲「偉大なるスルタン妃」（1615年出版）およびロペ・デ・ベガの中編小説「名誉ゆえの不幸」（1624年出版）を分析した。

第3章では、イスタンブールで長期にわたる虜囚生活を送ったディエゴ・ガランによる回想録・事情報告『虜囚生活と苦難』（17世紀前半執筆）を分析した。

サピエンシア、セルバンテス、ロペ、ガランはいずれも、実体験を通して、あるいは二次的に得た情報を通して、様々な面でスレイマン1世の時代とは様相を異にするオスマン帝国の姿に直面した。この時期のオスマン帝国は対外戦争や内乱で疲弊し、スルタンが政治・軍事の第一線から退くなど、権力構造のあり方に変化が生じていた。また、ヨーロッパとの軍事的な関係は膠着状態に入り、スペインとの関係においても、1581年に休戦協定が成立し、対立が緩和されている。

こうしたなか、サピエンシアがオスマン帝国の「弱体化」を強調しているのに対し、他の3人の書き手にとっては、オスマン帝国はいまだ強大で繁栄を続ける帝国である。帝国の国内情勢を熟知していたサピエンシアが過去との比較を通して「弱体化」という結論にいたったのに対し、セルバンテスとロペは、ハレムのスペイン人女性に重要な役割を与えたそれぞれの作品のプロットに帝国の権力構造の変化を取り込んでいるものの、「弱体化」言説は受け入れていない。一方ガランは、イスタンブールに長期間滞在したものの、虜囚生活における様々な制約から、オスマン帝国の制度的な側面に関しては4人のなかで最も情報に乏しかったと思われ、彼のテキストは、大帝国を目撃し驚嘆した少年の素朴な印象をそのまま伝える傾向が強い。

サピエンシアとガランはオスマン帝国を実見した実体験者であるが、帝国やトルコ人、そしてイスラームに否定的な、既存のステレオタイプの見方から自由ではなかった。そこには彼らの虜囚体験、そして彼らが帰国後直面した、自らのキリスト教的模範性の証明を求められる複雑な状況が影を落としていると考えられる。とりわけサピエンシアの見方は否定的で、オスマン帝国に学ぶべきものを見出そうとする姿勢が希薄である。またオスマン帝国の宗教的多元性については、両者とも否定的な見方を示している。それに対し、セルバンテスとロペはモリスコ追放問題という時代背景のなかで、スペインとの暗黙の対比

を通し、オスマン帝国の宗教的多元性を強調している。

また、サピエンシアとガランが、少なくともレトリックのうえで、オスマン帝国をキリスト教世界の敵とみなしているのに対し、セルバンテスとロペの作品では、帝国に対する敵愾心は希薄になっている。ガランのテキストが16世紀中葉の作家たちと同様の敵対的な二大帝国意識をなおも維持しているのに対し、セルバンテスとロペの作品は、西土二大帝国という枠組みは継承しているものの、そこには融和的な姿勢がみられる。オスマン帝国そのもの、そしてヨーロッパおよびスペインとオスマン帝国の関係が変化するなかで、二大帝国意識に多様な意味づけが生じていたことが、そこにかがえる。

以上の分析結果に基づき、「結論」にまとめたのは、次のような内容である。初期近代のスペインはヨーロッパにおけるオスマン帝国記述の先進地域ではなかったが、帝国の表象のあり方は複雑であり、そこではオスマン帝国をめぐる歴史的状況、個々の書き手とオスマン帝国の関係、個々の書き手のスペインへの視座が複雑に絡み合っている。本論文で扱った、16世紀半ばから17世紀半ばにかけての約1世紀という時間枠のなかでとりわけ注目すべき点を挙げれば、対称的なスペイン帝国とオスマン帝国という、スペイン作家に特徴的な二大帝国意識が継続しつつも、その意味づけに変化が生じていること、オスマン帝国の宗教的多元性について、16世紀においても17世紀においても、作家たちの見方が大きく分かれており、スペイン社会のあり方に対する個々の書き手の認識がそこに投影されていることである。